

氏 名： 藤田 さやか
学位の種類： 博士（看護学）
学位記番号： 甲第347号
学位授与年月日： 平成31年3月22日
学位授与の要件： 学位規則第3条第3項該当

論文題目： 日本在住外国人が災害時に健康を維持するための
文化をふまえた備えリテラシー向上プログラムの開発

Program Development to Rise Disaster Preparedness Literacy
for Maintain Health during Disaster with Considering the
Culture of Foreigners Living in Japan

主査 増野 園恵 教授（兵庫県立大学）
副査 岩崎 弥生 特任教授（千葉大学）
論文審査委員： 副査 佐々木 吉子 教授（東京医科歯科大学）
副査 木村 玲欧 准教授（兵庫県立大学）
副査 藤田 清士 教授（大阪大学）

論文要旨

昨今、災害多発化・甚大化とともに人口移動もグローバルな課題となっている。日本においては年々在留数が増加している外国人が、災害時に犠牲になったり、健康・生活への支障を感じたりしていることが徐々に明らかになっている。一方で、外国人は、災害への備えに関して、公助に依存・期待しており、自助の必要性の認識や災害リスクの認知が低い傾向が見いだされた。既存の防災教育にはない、災害時の外国人住民の生活や健康を維持するため自助を促進するための支援は、看護領域における重要課題である。本研究は、日本在住外国人の災害後の健康維持のため、文化をふまえた上での備えリテラシー向上プログラムの開発を目的とした。

研究枠組みはプログラム理論を元に、プログラム開発、介入、プログラム評価の3段階をとった。プログラム開発ではニーズアセスメント、最終目標および小目標の明確化、プログラム理論の明示をした。プログラムの実行性の確認と評価に必要なデータを収集するために、18歳以上の中長期在留者を対象に介入を実施した。介入では、情報提供の部分に加えて、参加者が自身の生活や文化に合わせた備えを考えることができるようリフレーミングプロセスを提供した。期待する効果は知識および情報活用能力（行動力）の向上であり、災害への備えリテラシーをアウトカムデータとし、作成した質問紙を用いて介入前後と2週間後の計3回測定した。プログラム評価は、セオリー・プロセス・アウトカムの3項目とし、有識者による第三者評価およびプログラム参加者から収集したデータ（属性、リフレーミングの回答、備えリテラシー）を使用した。属

性データは記述統計、相関分析、2 項ロジスティック回帰分析を用いて参加者とドロップアウト者の特性を分析し、アウトカムデータはカイ二乗検定と t 検定を用いて群内比較をした。記述データは単語の類似性を見ながら項目を作成し、変数化して同様に分析した。本研究は兵庫県立大学看護学研究科・地域ケア開発研究所研究倫理委員会の承認を得て実施した。

対象者のニーズアセスメントを実施した上で、「リスク認知」「備蓄」「避難計画」を必要行動とした備えの枠組みを構築し、目標を設定した。目標が達成できるよう一般的な知識提供と、自分の生活や文化をふりかえるリフレーミングで構成される備えリテラシー向上プログラムを開発した。プログラムは、表面妥当性と内容妥当性の評価後に、30 分程度の内容で、英語とやさしい日本語の 2 パターンを作成し、外国人のニーズに応じてオンライン化した。やさしい日本語および英語の教材として、オンラインで提供できるよう作成した。

セオリー評価の結果、プログラム最終目標は妥当で実現可能であったが、小目標は評価のための表現としては不明瞭な部分があり、下位スキルを明示することで改善可能と考えた。本プログラムの構成要素と内容は限局的であり、日本に在住する外国人に必要な備えを体系化していく必要性が示唆された。プロセス評価の結果、プログラムの参加率は 45.6 で、ドロップアウト率は 54.4 であった。ドロップアウトの関連要因の分析から、プログラム実施には語学能力と日本人の協力、および学習への動機づけの必要性が明らかとなった。動機づけや学習意欲の継続へのアプローチとして、注意、関連性、自信、満足感の 4 要素に対し、プログラムの改善点を考察した。さらに、国籍や宗教のみならず、滞日年数の短い者や語学能力の低い者など多様な文化背景を持つ対象者の個別性に対応するために、フィードバック機能やコンサルテーション機能の導入を改善点として示した。アウトカム評価の結果、参加者の備えリテラシーはプログラム実施により有意に上昇し、特に災害後の健康リスクに関する知識、健康維持に必要な備蓄の準備行動に変化があった。これは、災害看護の視点を活かした本プログラムの情報提供の効果と考える。情報提供時に、教材作成のポイントを忠実に再現できていない項目、なぜ必要であるかの説明がない項目、リフレーミングがない項目がある場合、リテラシー向上につながらないことが示唆された。一方で、リフレーミングで情報提供部分の補完が可能であることが明らかとなった。

Abstract

Disaster has become increasingly severe and more frequent, and population migration has also become a global issue. In Japan, the number of foreign victims of disasters has increased, and the problem of obstacles to health and life has also been clarified. Meanwhile, foreigners rely on public assistance for disasters preparedness, and it was found that the recognition of the necessity of self-help and the possibility of disaster risk recognition are low. Support for promoting self-help to maintain the lives and health of foreign residents in disasters, which is not found in existing disaster education, is an important issue in the field of nursing. Research purpose is to rise disaster preparedness literacy for maintain health during disaster with considering the culture of foreigners living in Japan

Research frame consists of program development, intervention, and program evaluation. Needs assessment, goal setting, and clear statement of program theory were conducted to provide clear, complete, and accurate information for program development. On intervention process, information and reframing were provided for medium-and-long term residents over 18 years of age on for disaster preparedness. Disaster preparedness literacy level was measured three times, before, immediately after and after two weeks of intervention. Theory, process, and outcome were used for evaluation of the program. Moreover, experts' evaluation and data collected from program participants (attribute, answering reframing, disaster preparedness, and literacy) were used for evaluation of the program. Descriptive statistics, correlation analysis, and regression analysis of attribute data were used to clarify participants' characteristics and dropout. Chi-square test and t-test were used to compare outcome data among before-and-after, and to analyze variable of descriptive data.

Disaster preparedness framework consisted of three actions: risk perspective, stockpiling, and evacuation plan. Then, program goals were set, a program was developed, and information was reframed to achieve aforementioned goals. The program was written in comprehensible Japanese and English languages for online assessment.

On the theory evaluation, program goals were reasonable. However, short-term goals seemed to improve using lower skills, as there were unclear expressions for evaluation. Since components and contents of this program are limited, systematizing necessary preparation for foreigners was suggested. On the process evaluation, participation rate were 45.6, and the dropout rate was 54.4 in this program. Factors related to dropout revealed a necessity for language ability, cooperation of Japanese residents, and motivation for learning program implementation. To motivate learning, improvement of

four program elements: attention, relevance, confidence, and satisfaction, were required. Furthermore, introduction of feedback and consultation were the improvement points for foreigners with diverse cultural background living in Japan. The outcome of the evaluation and disaster preparedness literacy significantly increased. Especially, knowledge of health risks after disasters and knowledge to maintain healthy behaviors had changed. The program enhances a greater understanding about important aspects of disaster nursing. This shows that no literacy improvement was possible if information for preparation or reframing was not integrated in the teaching material. Moreover, it was possible to supplement the information through reframing.

論文審査の結果の要旨

本研究は、文化の違いや言語の問題により災害時に脆弱となる外国人の災害への備えに着目し、日本在住外国人が災害時にも健康を維持するために文化をふまえた上で備えのリテラシーを向上させるプログラムを開発することを目的としたものである。研究は、プログラム理論を枠組みとし、プログラム開発、介入、プログラム評価の3段階で実施された。開発では、文献レビューと対象者のニーズアセスメントに基づきリスク認知、備蓄、避難計画を必要行動とした備えの枠組みとプログラム目標を設定し、知識提供にリフレーミングを組み込んだプログラムとその提供のための英語と平易な日本語によるオンライン教材を作成した。介入では、作成したプログラムを日本在留外国人に提供し実行可能性を確認した。プログラム評価では、エキスパートによる第三者評価および介入時に収集した備えリテラシーの測定結果を用い、プログラムのセオリー、プロセス、アウトカムの3側面からの評価を行い、プログラムの改善点を考察した。プログラムに自分の生活や文化を振り返るリフレーミングを組み込むことで、参加者の備えのリテラシー、特に災害後の健康リスクに関する知識と健康維持に必要な備蓄の準備行動に変化が認められた。一方で、アクセス者の約半数がプログラムを完了しておらず、ドロップアウトの要因分析から、語学能力、日本人の協力の有無、リスク認知の低さの影響が示唆され、多言語による提供や多様な文化背景を持つ外国人の個別性に対応するためのフィードバック機能等の導入が改善点として見いだされた。

研究計画は途中で見直しが行われたことで、プログラム開発という本来の研究目的がより明確となり、目的に沿った研究プロセスを段階的に展開でき、研究結果は的確かつ明確に記述され、一貫した分析と考察がなされていることが確認された。課題について多角的に丁寧な文献検討がなされ、これまで十分な検討がなされていない災害時の外国人支援に関して、健康維持へのアプローチという看護学の視点に、防災リテラシーと多文化共生の視点が加えられ、オンラインツールという情報技術を活用し、実践的な介入方法を見出している点に独自性と新規性が認められ、災害看護学への貢献と研究の今後の発展が期待できると評価された。

以上より、審査委員全員が本論文は博士の学位論文に値すると判断した。